2　各種開発に伴う試掘・範囲確認調査

例　言

1．本書は諫早市教育委員会が、平成９年度から平成17年度にかけて国・県の補助を受けて実施した埋蔵文化財の発掘調査（各種開発に伴う試掘・範囲確認調査）の調査結果を掲載したものである。

2．掲載は、年度ごと・着手順を基本としているが、調査対象が同一遺跡の場合は、遺跡ごとに複数年度分を一括して掲載している。

3．各調査の担当者については文中に掲載している。

目　次

1　有喜・上原遺跡（平成10年度）…77
2－1　上峰原遺跡（平成10年度）……78
2－2　上峰原遺跡（平成13年度）……79
2－3　上峰原遺跡（平成17年度）……80
3　平山遺跡（平成10年度）……81
4　土師野尾遺跡（平成11年度）……83
5　源貞遺跡（平成11年度）……84
6　源内谷遺跡（平成11年度）……85
7　堤の端遺跡（平成11年度）……86
8　滑川遺跡（平成11年度）……87
9－1　開城跡（平成11年度）……89
9－2　開城跡（平成12年度）……89
10　風突谷・山留阪遺跡（平成12年度）…90
11－1　田井原条里遺跡（平成12年度①）…92
11－2　田井原条里遺跡（平成12年度②）…93
11－3　田井原条里遺跡（平成14年度①）…94
11－4　田井原条里遺跡（平成14年度②）…94
11－5　田井原条里遺跡（平成14年度③）…95
11－6　田井原条里遺跡（平成14年度④）…96
11－7　田井原条里遺跡（平成15年度①）…97
11－8　田井原条里遺跡（平成15年度②）…98
12　永昌遺跡（平成12年度）……99
13　旧長崎刑務所跡地（平成13年度）…100
14－1　小野条里遺跡（平成12年度）……101
14—2　小野条里遺跡（平成14年度）……102
15－1　小栗Ｃ地点遺跡（平成13年度）…103
15－2　小栗Ｃ地点遺跡（平成14年度）…103
16　菅牟田池遺跡（平成14年度）……104
17　宮崎館遺跡（平成14年度）……106
18　上横址遺跡（平成15年度）……107
19　大野台遺跡（平成16年度）……108
20　貝津横島Ｂ遺跡（平成16年度）…109
21　有喜・上原遺跡（平成16年度）…111
22－1　諫早南部区画整理（平成16年度）…112
22－2　諫早南部区画整理（平成17年度）…114
23　開遺跡（平成17年度）……116
24　小栗Ｂ地点遺跡（平成17年度）…117
25　周知外遺跡①（平成17年度）……118
26　小栗Ａ地点遺跡（平成17年度）…119
27　周知外遺跡②（平成17年度）……120

1．有喜・上原遺跡（うき・うえはらいせき）

1．調　査　地　　諫早市松里町124
2．調査原因　　個人住宅建設
3．調査期間　　平成10年６月29日～７月６日
4．調査面積　　38㎡
5．調査区分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

遺跡は橘湾を望む標高14～20mほどの丘陵の先端部に位置する。

現在は畑や墓地として利用されているが、以前から遺物の散布が顕著に認められる所として知られており、採集された遺物としては、縄文土器・弥生土器・土師器・鉄器などがある。隣接する有喜貝塚と同じく縄文時代中期から営まれ、弥生時代を経て、古墳時代までの長期に存続したものと思われる。

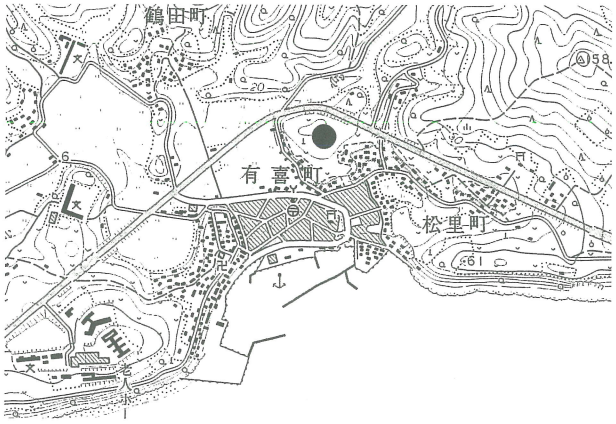
2．調査の記録

３箇所のトレンチを設定したが、いずれも現地表面から10～15cmで地山（安山岩を主とする火砕泥流）に達するという状況であった。表採遺物は摩滅しており、包含層が流失していると思われる。

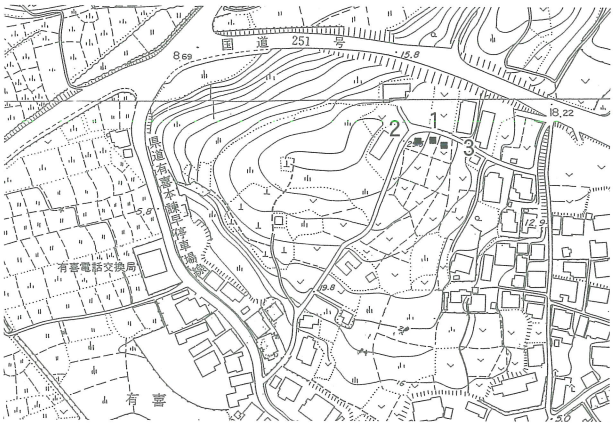
3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。

なお、この調査地から南へおよそ100mのところで実施した調査（平成16年度範囲確認、16・17年度本調査、本報告書121Ｐ～ ）では、弥生時代の甕棺墓３基、古墳時代の竪穴住居跡２棟などが確認されている。



調査位置図（Ｓ－1/25,000）



トレンチ配置図（Ｓ－1/5,000）

２－１．上峰原遺跡（かみみねはらいせき）

平成10年度

１．調　査　地　　諫早市栄田町361－２

２．調 査 原 因　　個人住宅建設

３．調 査 期 間　　平成10年11月24日～27日

４．調 査 面 積　　23m²

５．調 査 区 分　　範囲確認調査

６．調査後措置　　工事実施

７．調査担当者　　川瀬　雄一

１．遺跡の立地と環境

遺跡は国道34号線（諫早北バイパス）に隣接する標高50mほどの丘陵地にあり、近年宅地化が進んでいる地域にある。

近隣での過去の調査例としては以下のものがあげられる。

昭和49～50年度に、諫早北バイパスの建設に伴い、長崎県教育委員会が調査を実施し、旧石器～縄文時代の遺物などが出土した（長崎県教育委員会『諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第１集　図録編』1975）。平成８年度には、諫早西部団地造成工事に伴い、諫早市埋蔵文化財調査協議会が下峰原遺跡の発掘調査を実施し、ナイフ形石器や縄文時代晩期の埋甕２基が出土した（諫早市埋蔵文化財調査協議会『下峰原遺跡』1998）。平成10・11年度には同じく諫早西部団地造成工事に伴い、諫早市埋蔵文化財調査協議会が下峰原高場遺跡の発掘調査を実施した（諫早市埋蔵文化財調査協議会『下峰原高場遺跡』第４集　2002）。ＡＴ火山灰降灰直後の旧石器群・縄文時代草創期～早期の土器などが出土、縄文時代早期石鏃が多量に出土したのも大きな特徴であった。

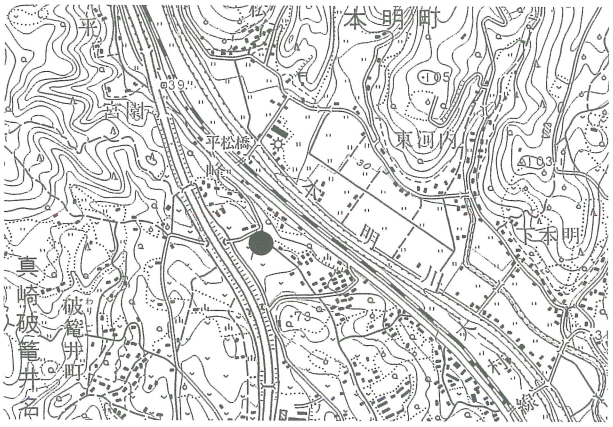
今回調査地の現況は畑で、標高は63mほどである。

２．調査記録

２×２mのトレンチ２箇所、1.5×1.5mのトレンチ１箇所の計３箇所を調査した。いずれのトレンチにおいても地表下15cmほどで、重機の痕跡が認められ、深耕がなされているという状況であった。

３．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（Ｓ－1/25,000）

トレンチ配置図（Ｓ－1/5,000）

２－２．上峰原遺跡（かみみねはらいせき）

平成13年度

１．調　査　地　　諫早市栄田町376－１ほか
２．調 査 原 因　　個人住宅・店舗建設
３．調 査 期 間　　平成13年９月25日～10月２日
４．調 査 面 積　　10㎡
５．調 査 区 分　　範囲確認調査
６．調査後措置　　工事実施
７．調査担当者　　川瀬　雄一

１．遺跡の立地と環境

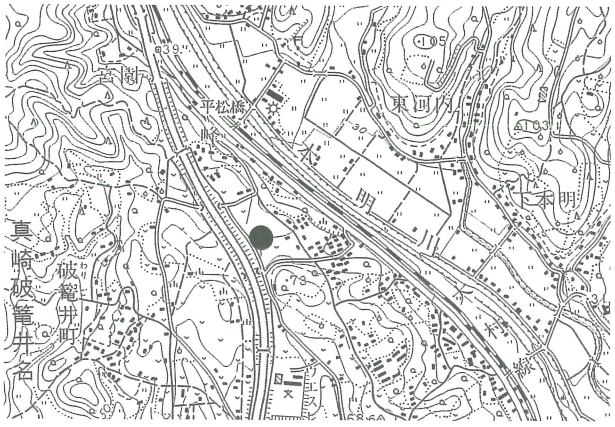
平成10年度記載と同じ。諫早北バイパスの東側に隣接し、調査地の現況は畑で、標高は62.5mである。

２．調査の記録

２×２ｍのトレンチ２箇所、1.5×1.5ｍのトレンチ１箇所の計３箇所を調査した。層位は、１層－耕作土、２層－黒褐色粘質土、３層－埋土、４層－地山（安山岩風化礫層）である。地表面から60㎝～１ｍほどで地山に達し、東側のほうが深い。埋土については、北バイパス建設の際の側道工事によるものと思われる。

３．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（Ｓ－1/25,000）

トレンチ配置図（Ｓ－1/5,000）

２－３．上峰原遺跡（かみみねはらいせき）

平成17年度

１．調　査　地　　諫早市下大渡野町63－１ほか

２．調 査 原 因　　個人住宅建設

３．調 査 期 間　　平成17年６月６日～８日

４．調 査 面 積　　40㎡

５．調 査 区 分　　範囲確認調査

６．調査後措置　　工事実施

７．調査担当者　　川瀬　雄一

１．遺跡の立地と環境

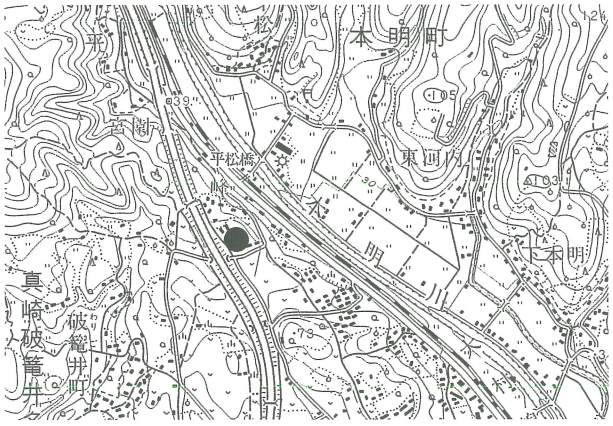
平成10年度記載と同じ。調査地の現況は畑で、標高は70ｍである。

２．調査記録

３×３ｍのトレンチ３箇所、２×２ｍのトレンチ１箇所、3.5×2.5ｍのトレンチの計５箇所を調査した。１層－表土、２層－黒褐色粘質土、３層－埋土、４層－地山で、４箇所で重機による掘削の痕跡が認められた。遺物は、縄文土器や黒曜石片など70点である。

３．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（Ｓ－1/25,000）

トレンチ配置図（Ｓ－1/5,000）

3．平山遺跡（ひらやまいせき）

1．調　査　地　　諫早市平山町374
2．調査原因　　携帯電話中継局建設
3．調査期間　　平成11年２月22日～３月３日
4．調査面積　　140㎡
5．調査区分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　秀島　貞康

1．遺跡の立地と環境

平山遺跡は、東経130°２′30″、北緯32°49′30″、標高80m前後に立地している。遺跡西方には碁盤ノ辻、八天岳を源流とする東大川が北流して狭小な河岸段丘を形成しながら大村湾へと流入している。段丘上に展開する水田は標高で10～20mを測り、遺跡との比高は60～70mである。遺跡のすぐ北側には昭和54年調査された平山遺跡Ｂ地点が立地し、同遺跡はナイフ形石器から土師器まで出土する複合遺跡で、直線で400m、比高で30mの本遺跡との関連が想起された。

2．調査の記録

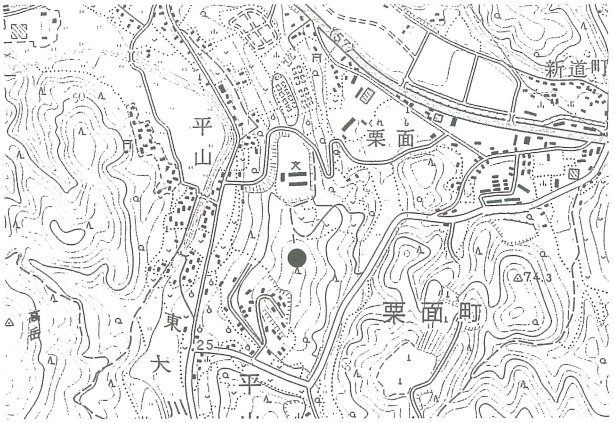
基地局建設予定面積は300㎡程で、調査は２箇所のトレンチを設定して実施した。

Ｔ－１　里道に並行した３×５mのトレンチである。標高で79m強を測る。１層は表層土、２層は再堆積様の黄褐色土、３層は地山で火砕流堆積物である。風化した安山岩風化礫を包含する。２層は３層の人為による堆積層で、層中に炭化物を含んでいる。この２層を剥除すると土壙が検出された。土壙の形状は略楕円形状を示し、法量はウワバで長軸２m、短軸１m、深さ30㎝、床面は平坦でなく長軸で1.6m、短軸で0.6mである。覆土は黄褐色土を基調に炭化物や焼土を混じえ、削片や土器片をわずかに包含する。壙底ほぼ中央に被熱部分が25×20㎝の範囲で確認された。土壙の機能は不明である。

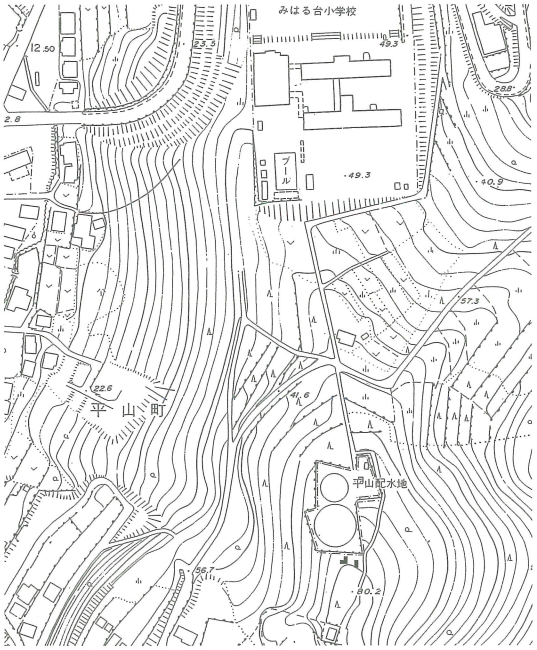
Ｔ－２　Ｔ－１より西に距離10m、比高１mほどの地点に設定した。トレンチは50㎝幅、延長５mでＬ字形に設定し、包含層の有無を確認するため調査した。本トレンチは斜面地に位置しているため、土層の堆積はＴ－１と異なり、２層包含層が存在しないことが確認された。

3．調査所見

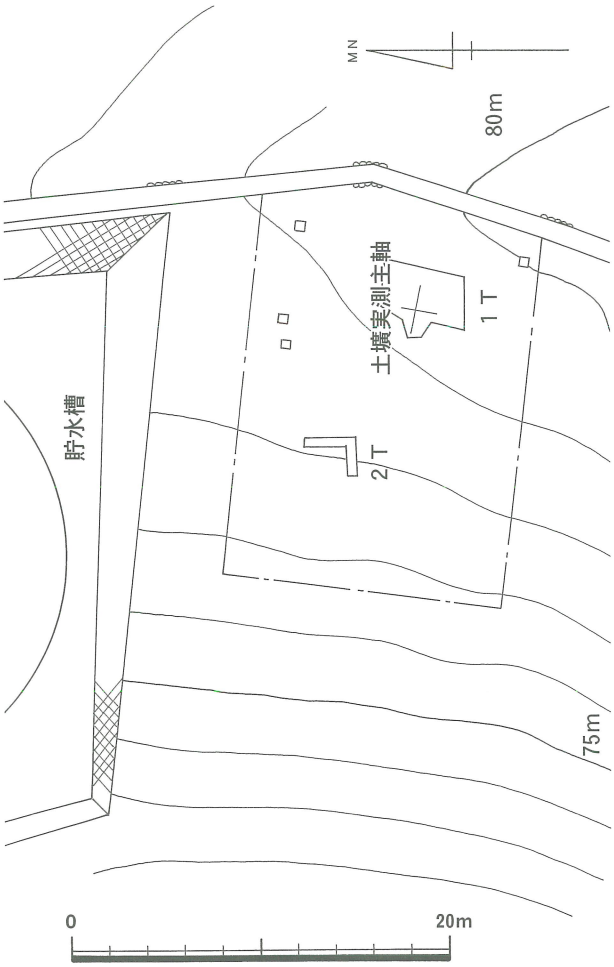
以上により、１基の土壙を検出したが覆土の状況から近時の所産と想定され調査を終了した。



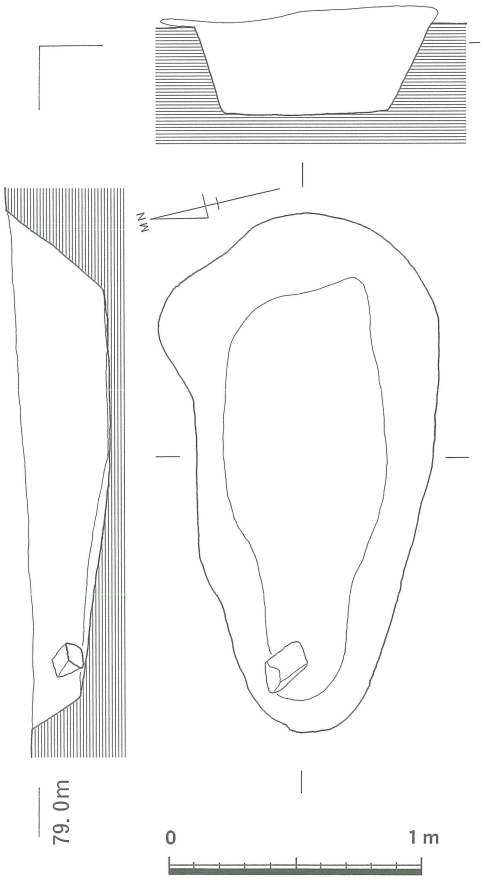
調査位置図（S－1/25,000）



トレンチ配置図（S－1/5,000）



トレンチ配置図（S－1/400）



土壙実測図（S－1/30）

4．土師野尾遺跡（はじのおいせき）

1．調　査　地　　諫早市土師野尾町2007
2．調査原因　　携帯電話中継局建設
3．調査期間　　平成11年７月13日～22日
4．調査面積　　34㎡
5．調査区分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　秀島　貞康

1．遺跡の立地と環境

土師野尾遺跡は県道諫早－江の浦線の西側丘陵に位置し、近傍に唐津焼最初期の所産である土師野尾古窯跡群がある。土師野尾古窯跡群はハラタラ窯と中道窯の２基からなり、このうちハラタラ窯と同一丘陵に立地するのが今回調査を実施した土師野尾遺跡である。

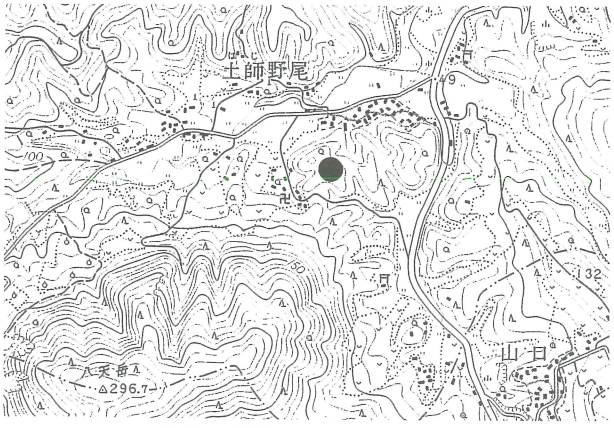
遺跡は２箇所の古窯を繋ぐ中道の最高点から北に70mほど分け入った山頂にあり、周辺を眺望する位置にある。標高は93mほどを測る。

2．調査の記録

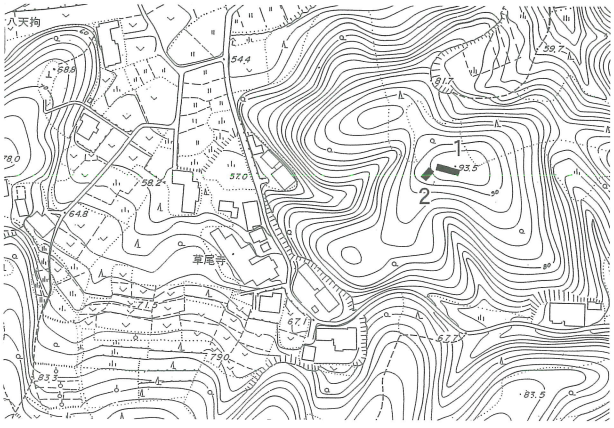
調査は頂部に２×12m、斜面部に２×５mの２本のトレンチを設定して実施した。土層の状態は１Ｔ１層が表層土、２層が地山風化土、３層地山砂岩層で人為層は存在しなかった。また表層土下に焼土の痕跡が認められ、覆土は１層黄灰色粘質土、２層淡黒色土層（炭混じりの焼土層）で近時の所産と想定された。２Ｔも１～３層は同様で人為は認められなかった。

3．調査所見

以上により、本調査箇所は人為の入らない丘陵であることが判明した。



調査位置図（Ｓ－1/25,000）



トレンチ配置図（Ｓ－1/5,000）

5．源貞遺跡（げんていいせき）

1．調　査　地　　諫早市目代町737－1ほか
2．調査原因　　病院建設
3．調査期間　　平成11年10月20日～10月25日
4．調査面積　　140㎡
5．調査区分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　秀島　貞康

1．遺跡の立地と環境

源貞遺跡は東経130°3′30″、北緯32°53′30″に位置し、標高220m前後に立地している。北走する県道を挟んで昭和49年県教育委員会が試掘調査を実施した源貞遺跡（注1）があり、本調査地もその中に包含されるものと想定された。源貞遺跡はⅡ層（黄褐色土、15～20cm）、Ⅲ層（黒褐色粘質土、20～25cm）に文化層が認められ、2層石器は細石刃文化期、Ⅲ層は百花台Ⅰ型台形石器文化期の所産とされ、その連続が想定された。

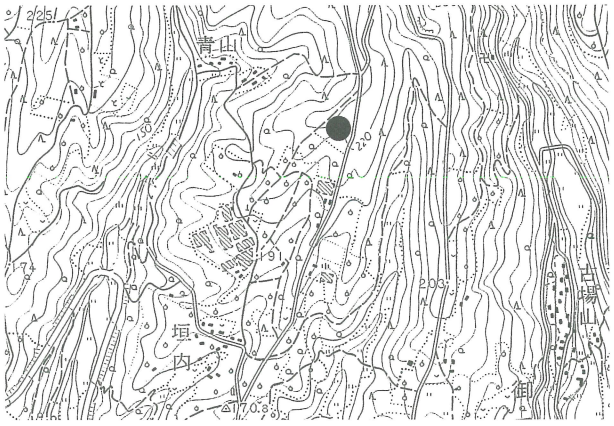
2．調査の記録

対象面積は4haに及ぶ広大な面積であったが、昭和30年代以降の畑地開墾による撹乱でかなりの程度破壊が進行している。調査は旧地形を想定して7箇所のトレンチを設定し、調査を行ったが、いずれのトレンチからも包含層の確認がなされず、包含層は消滅したものと想定された。

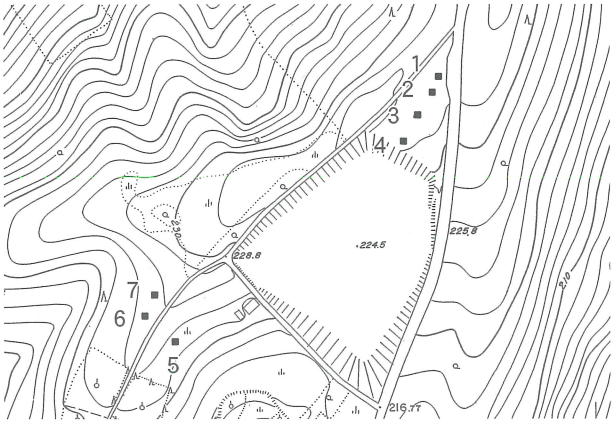
3．調査所見

遺跡は消滅しており、源貞遺跡からの範囲の延長は認められない。

注1．長崎県教育委員会「源貞遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報』Ⅱ　1979



調査位置図（S－1/25,000）



トレンチ配置図（S－1/5,000）

6．源内谷遺跡（げんないだにいせき）

1．調　査　地　　諫早市小川町455－１ほか
2．調査原因　　宅地造成
3．調査期間　　平成11年10月20日～26日
4．調査面積　　30㎡
5．調査区分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

今回の調査地は市道夫婦木有喜線の東側にあり、現況はほとんどが農地で、東側に向かって山林が広がっている。標高は45～62ｍである。

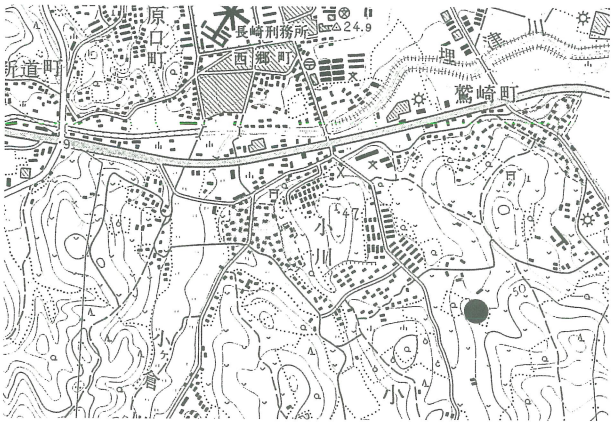
近隣での調査例としては、長崎県教育委員会が行った小栗Ｂ遺跡の調査（『小栗Ｂ遺跡』長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅷ、長崎県文化財調査報告書第75集　長崎県教育委員会　1985)、諫早市教育委員会が行った林ノ辻遺跡の調査（『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書第４集　諫早市教育委員会　1983）がある。調査では弥生時代中期の甕棺墓、古墳時代の箱式石棺墓、中世の土壙墓など確認されている。また、平成８年度の小栗Ｃ地点遺跡の調査では弥生時代後期の丹塗りの筒形器台が出土している。

2．調査の記録

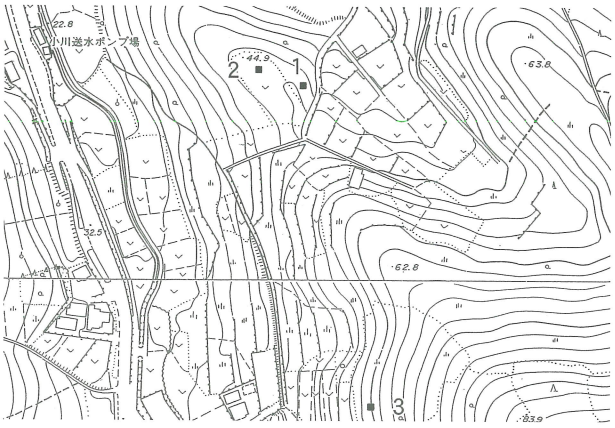
事業面積が広範囲におよぶため、旧地形が残っていると思われる箇所にしぼって５×２ｍのトレンチを３箇所設定した。しかし、いずれにおいても人為による影響の痕跡があった。

3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（Ｓ－1/25,000）



トレンチ配置図（Ｓ－1/5,000）

7．堤の端遺跡（つつみのはたいせき）

1．調　査　地　　諫早市天神町927－1
2．調査原因　　農道建設
3．調査期間　　平成11年11月9日
4．調査面積　　8㎡
5．調査区分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

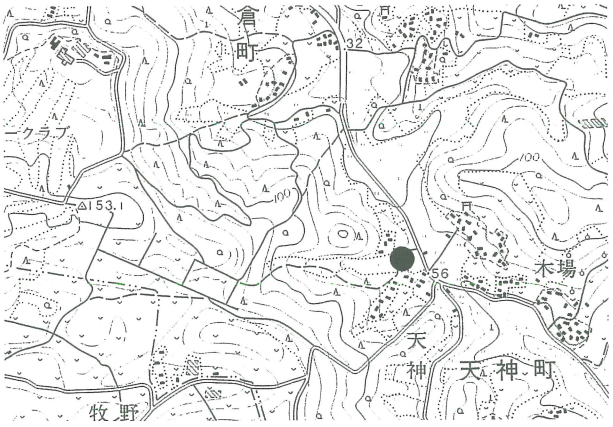
調査地の現況は田で、標高60mほどの丘陵に位置する。

2．調査の記録

2×2mのトレンチを2箇所設定したが、ともに地表面から30㎝程度で地山に達するという状況であった。

3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（S－1/25,000）

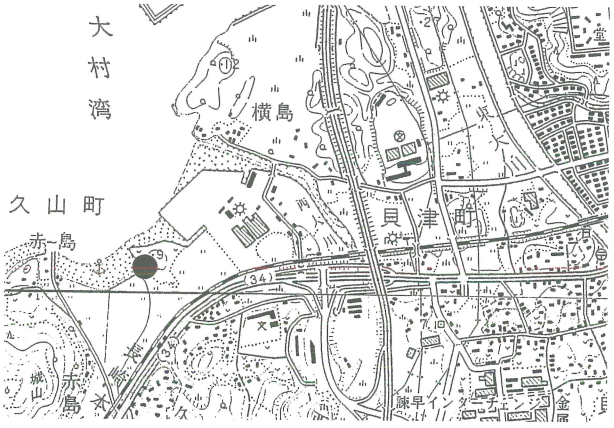
トレンチ配置図（S－1/5,000）

8．滑川遺跡（なめりかわいせき）

1．調　査　地　　諫早市久山町1909ほか
2．調査原因　　河川改修
3．調査期間　　平成12年１月11日～21日
4．調査面積　　60㎡
5．調査区分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　秀島　貞康

1．遺跡の立地と環境

滑川遺跡はＪＲ長崎線の西側に位置し、大村湾最奥部の標高７ｍを測る独立丘陵及び周縁の1.3ｍ前後の裾部からなり、裾部は畑・水田として利用されている。独立丘陵は西大川や久山川の浸食などによる残丘として残されたもので、近くには横島の残丘も見られる。周縁部は鋭く浸食され、屹立した状況を見せる。これら残丘の基盤層は古第三紀砂岩層と想定される。上位には凝灰角礫岩を主体とした火砕堆積物が厚く被覆する。この層位の上に起源不明の火山灰様土が４・５トレンチには存在しているが、１～３トレンチではこの層は流失しており、多くは久山川の河川堆積物が載っている。石棺などの遺構はこの層を切って構築され、３・４トレンチの東側丘陵斜面部には弥生時代中期初頭からの石棺や甕棺（注１）が営まれており、この傾向は化屋大島遺跡（注２）、前島石棺群（注３）など大村湾沿岸の墓地造営の傾向と見ることができる。



第１図　調査位置図（Ｓ－1/25,000）

2．調査の記録

調査は５箇所のトレンチを設定（第２図）して実施した。１～３トレンチは久山川隣接の畑地に設定した。層序は凝灰角礫岩を主体とした火砕堆積物を基底（４層）に、１Ｔでは灰～橙色の砂層で拳大～小児人頭大の亜角礫を30cmほど堆積させる３層があり、その上に淡黒色礫層の２層が載るという層順である。この２層は礫間に２～４㎜大の小礫を含み、遺物包含層かと思われたが、遺物はローリングを受けており、安定した層とは見られなかった。この２層は２・３トレンチにも広がり、往時の河川の影響を受けた腐食質を含む層である。この２層のうえに上下２枚に分層できる表層土が堆積している。２・３トレンチでは前記３層が欠如するほかは同層位である。丘陵部に設定した４・５トレンチは表層土下は黄茶色の火山灰層で遺物は須恵器の出土は見たものの、遺構の検出は見られない。

第３図に４トレンチから検出した須恵器を掲載した。１は復元口径14cm程の高坏と思われる資料で、坏部と脚部接合付近である。外面端ヘラケズリを施し、ロクロは反時計回りである。２はハソウまたは平瓶の口縁部と思われる資料である。復元口径８cm、残存高４cmで頸部から

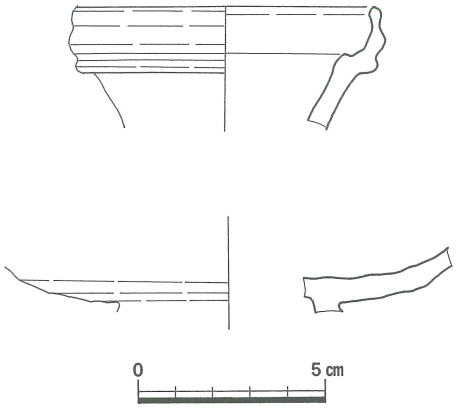
立ち上がる口縁部は外に拡張して造作している。いずれも５世紀代の資料と見られ、この時期までの遺跡の利用が知れる資料である。各トレンチからの出土遺物は以下のとおりである。

	土　器	須恵器	陶質土器	砂　岩	黒曜石	安山岩	結晶片岩	石　英	計
１Ｔ	1				2	1	1	1	6
２Ｔ					6				6
４Ｔ		2	1	6	30	4	2		45
５Ｔ	2			3	17	3	1		26
計	3	2	1	9	55	8	4	1	83

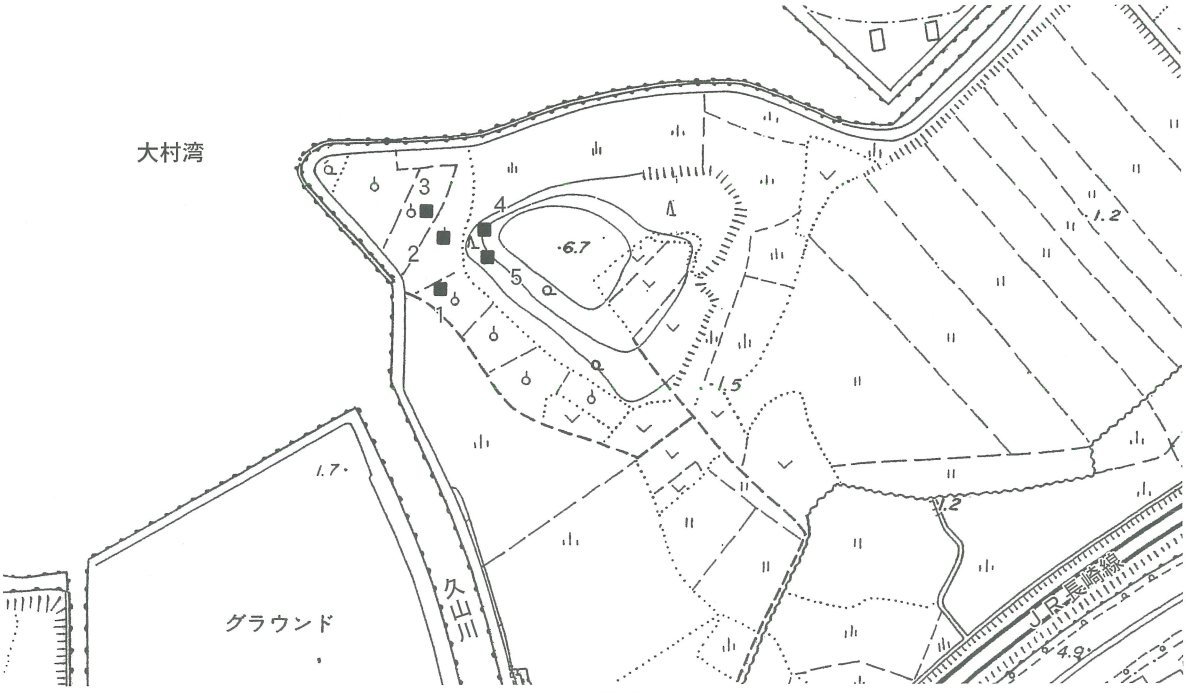
３．調査所見

上表のとおり遺物の検出はなされるものの、包含層あるいは遺構からの出土でなく、遺跡の範囲からは外れているものと思量された。

注１．本報告書第Ⅱ章
『滑川遺跡』
注２．多良見町教育委員会
『化屋大島遺跡』1974
注３．時津町教育委員会
『前島古墳群Ⅱ』1994



第３図　出土遺物実測図（Ｓ－1/2）



第２図　トレンチ配置図（Ｓ－1/2,500）

9－1・2・3．開城跡（第1・2・3次）（ひらきじょうし）

1．調　査　地　　諫早市上大渡野町73番地外、下大渡野町2181番地外

2．調査原因　　圃場整備

3．調査期間　　第1次調査・範囲確認調査　　平成12年2月22日～3月27日

　　第2次調査・範囲確認調査　　平成13年1月17日～3月19日

　　第3次調査・本調査　　平成14年6月25日～平成15年3月25日

4．調査面積　　第1次調査　　198㎡

　　第2次調査　　234㎡

　　第3次調査　　14,500㎡

5．調査区分　　第1・2次・範囲確認調査

　　第3次・本調査

6．調査後措置　　工事実施

7．調査担当者　　秀島　貞康

第1・2次調査については「開城跡」としたが、古記録を出典として本調査は「尾和谷城跡」と変更して報告した。

詳細については、「尾和谷城跡」『諫早市文化財調査報告書』第16集　2004に掲載

10．風突谷・山留阪遺跡（ふうづきだに・やまとめさかいせき）

1．調　査　地　　諫早市大場町803－1
2．調 査 原 因　　工場建設
3．調 査 期 間　　平成12年9月18日～28日
4．調 査 面 積　　140m²
5．調 査 区 分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　秀島　貞康

1．遺跡の立地と環境

本遺跡は多良山塊から派生する丘陵がその高度を緩やかに変換する遷移点近くに立地し、このため小規模の溜池が周辺に多く存在する。標高はこの地点の最高所で334mを測る。周辺には縄文時代早期から後期の川頭遺跡など多くの遺跡が存在する。本遺跡は平成9年に実施した遺跡確認調査でその存在が明らかになったもので、その折は滑石混入の太形凹文を施文した縄文後期の土器、外面ハケメ調整の土師器などが包含層主体に確認（第3図）され、複合した時期の遺跡であることが判明した。

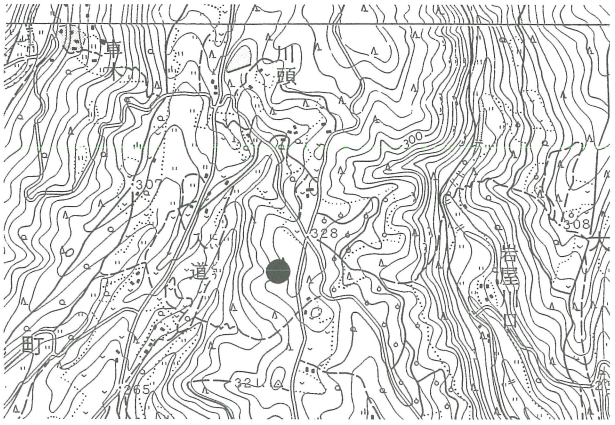
このことから今次の調査も当該期の遺構の確認の可能性が高いと想定して実施した。

2．調査の記録

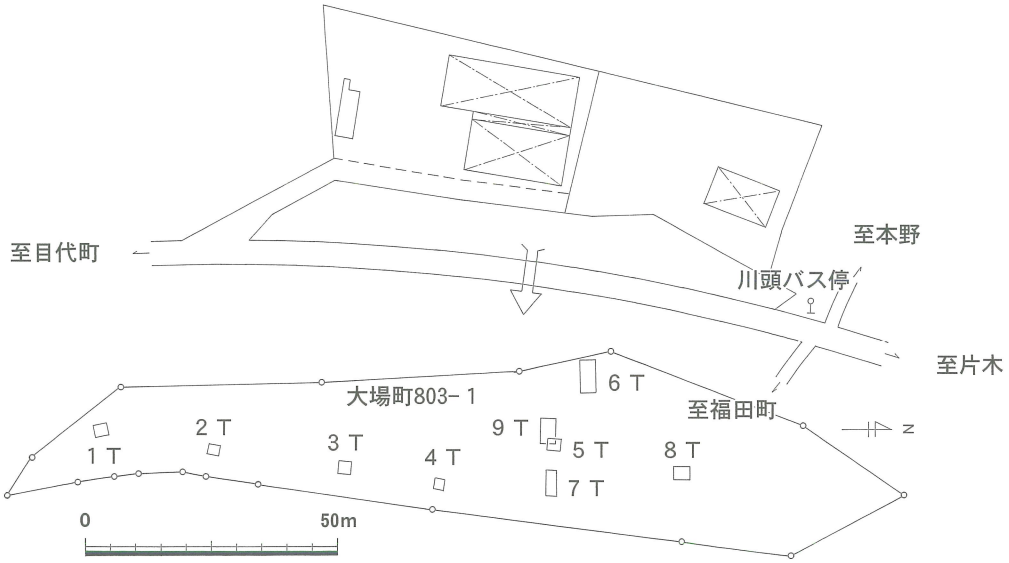
調査は平成9年実施の延長でトレンチを4箇所（6～9トレンチ）設定し実施した（第2図）。設定箇所は遺跡最高位から北に標高を逓減する位置に相当しており、遺構は確認されなかった。ただ6トレンチにおいて土師器坏（第3図5）が検出されており11～12世紀に当地が利用されたことを示唆している。

3．調査所見

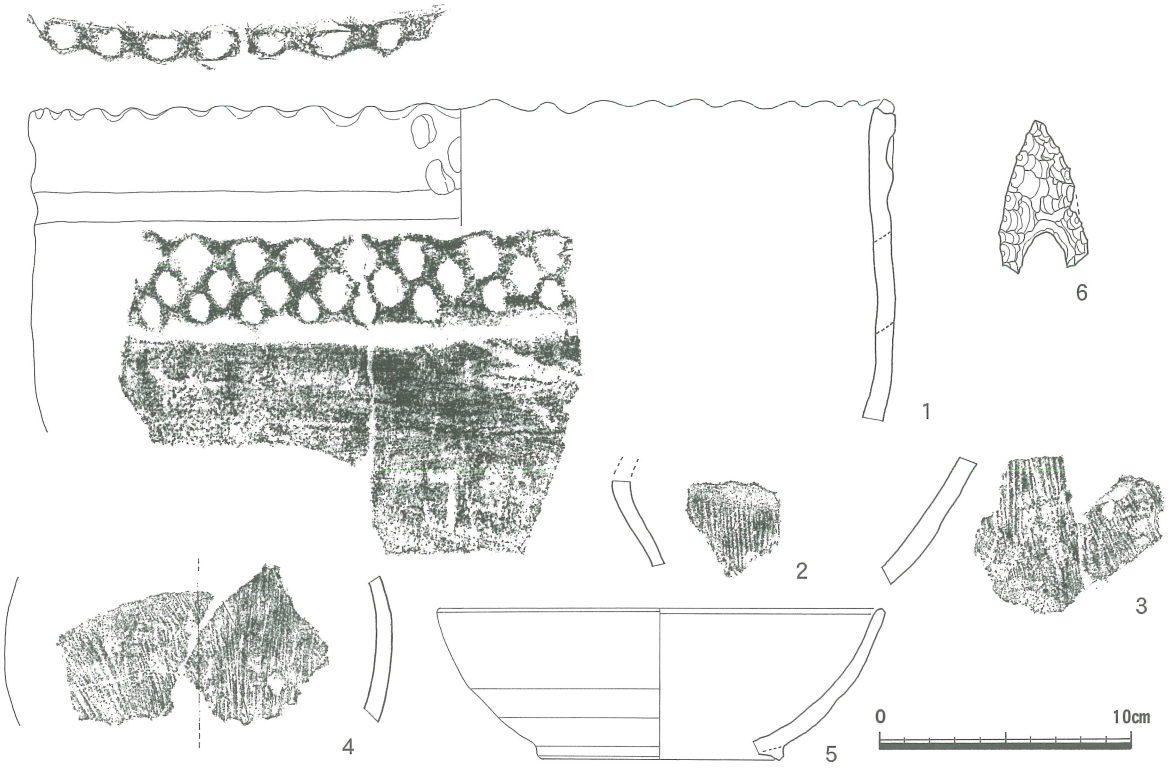
今回の調査地点は遺跡の北斜面に位置し、遺跡の範囲外であることが確認された。先年の出土土器を併せて第3図に掲載する。1は滑石を含む太形凹文を口縁部下に施文する縄文後期の阿高系土器で、川頭遺跡との関連を窺わせる。2～4は内外面にハケ調整を施す土師器である。ただ今次の6トレンチで検出した土師器坏は11～12世紀に当地が利用されたことを示唆しており、また古墳時代の遺物を有することは、同標高に位置する白木峰遺跡と同様であり空間利用のあり方として興味深いものを有している。



第1図　調査位置図（S－1/25,000）



第２図　トレンチ配置図（Ｓ－1/1,500）



第３図　遺物実測図（Ｓ－1/3、６はＳ－2/3）

11－１．田井原条里遺跡（たいばるじょうりいせき）

平成12年度①

１．調　査　地　　諫早市幸町323ほか

２．調 査 原 因　　共同住宅建設

３．調 査 期 間　　平成12年11月10日

４．調 査 面 積　　23㎡

５．調 査 区 分　　範囲確認調査

６．調査後措置　　工事実施

７．調査担当者　　川瀬　雄一

１．遺跡の立地と環境

本遺跡については、昭和22年に米軍が撮影した航空写真に短冊状の条理地割が認められることにより、遺跡のゾーニングを行っているが、遺跡の西側は既に市街地化され、東側についても昭和37～41年に実施された大規模な土地改良事業により、地形は大きく改変されている。したがって、先述の短冊状の条里地割の痕跡は極めて部分的にしか残存していない。

条里の成立年代を示す資料は乏しいが、平成９年に行った近隣での調査で出土した須恵器の年代から、少なくとも８世紀後半以降と思われる。南側の丘陵上には古代の駅制に伴う「船越駅」想定地があり、本遺跡が官給田であった可能性がある。

遺跡の西側には沖城跡がある。中世に諫早を治めていた西郷氏が支城として築き、西郷氏に代わって諫早を治めた龍造寺家晴（諫早家初代）が隠居したと言われる。平成７年度に農道拡幅に伴う調査（『沖城跡』長崎県文化財調査報告書第143集　1998　長崎県教育委員会）、平成９・10年及び16年の市道拡幅に伴う調査（『沖城跡』諫早市文化財調査報告書第14集　2000　諫早市教育委員会、『沖城跡Ⅱ』諫早市文化財調査報告書第18集　2005　諫早市教育委員会）では、中世～近世初頭の国産・輸入陶磁器が豊富に出土、墨書木簡などの木製品、溝状遺構、鋳造関連土壙などが確認された。

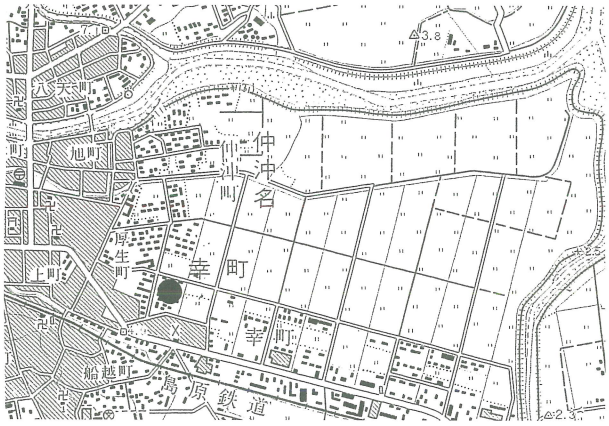
今回調査地の現況は資材置場で、住宅街の中にある。標高は４ｍである。

２．調査記録

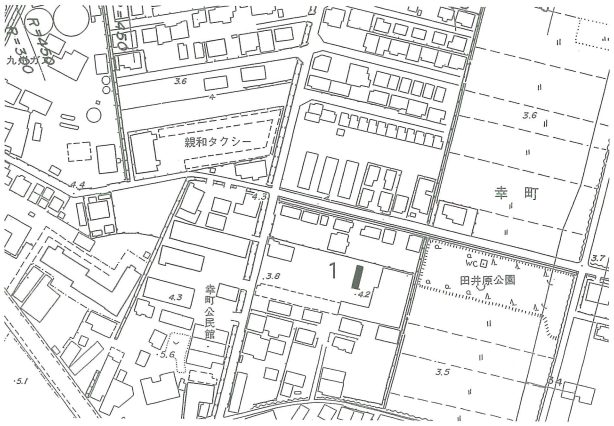
埋土が堆積していることから、重機により15×1.5ｍのトレンチを掘削した。1.3ｍほどの盛土がなされていた（１層）。盛土下に黒色粘土層（２層）があり、標高2.8ｍを測る。この層は水平に堆積しており、下部には鉄分の沈殿が見られることから、旧水田面と考えられる。この下には灰色粘土層（３層、いわゆるガタ土）が堆積している。

３．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（S－1/25,000）



トレンチ配置図（S－1/5,000）

11－2．田井原条里遺跡（たいばるじょうりいせき）

平成12年度②

1．調　査　地　　諫早市幸町263－1・264－1
2．調 査 原 因　　工場建設
3．調 査 期 間　　平成12年12月15日
4．調 査 面 積　　90㎡
5．調 査 区 分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

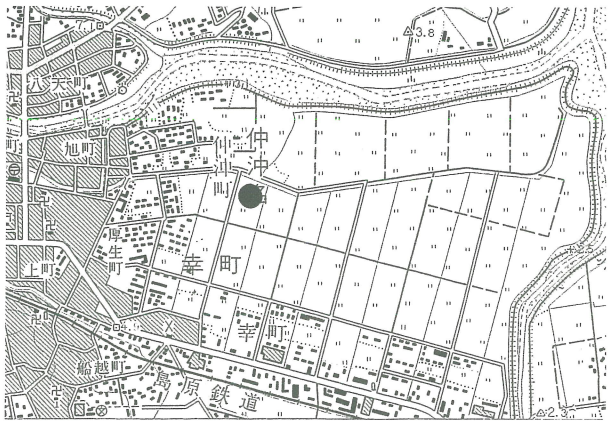
平成12年度①記載と同じ。今回調査地は市街地から東側にある水田地帯で、標高は2.6mである。

2．調査記録

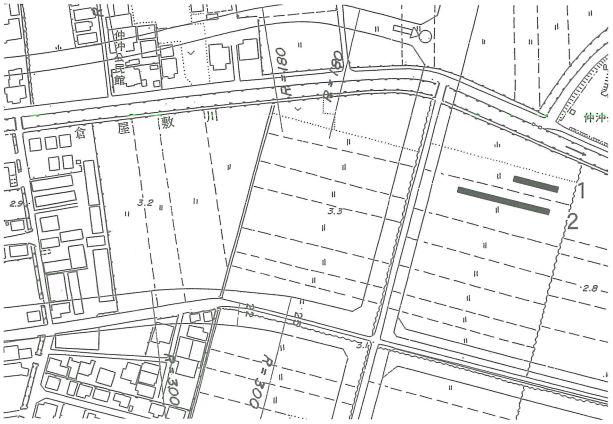
25×1.2mと59.3×1mの2本のトレンチを設定、重機により掘削して行った。層位は1層－耕作土、2層－床土、3層－灰白粘土層、4層－青灰色粘土層である。数箇所で溝状の落ち込みが確認された。浅い皿状と底部が平で箱形を呈するものであるが、条里にともなうものかどうかは不明である。青花破片1点が出土したが、これは沖城跡で出土するものと同じであり、前述の土地改良事業の土砂の移動の際に動いたものと思われる。

3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（S－1/25,000）



トレンチ配置図（S－1/5,000）

11－3．田井原条里遺跡（たいばるじょうりいせき）

平成14年度①

1．調　査　地　　諫早市幸町207－1
2．調 査 原 因　　共同住宅建設
3．調 査 期 間　　平成14年4月30日
4．調 査 面 積　　3㎡
5．調 査 区 分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

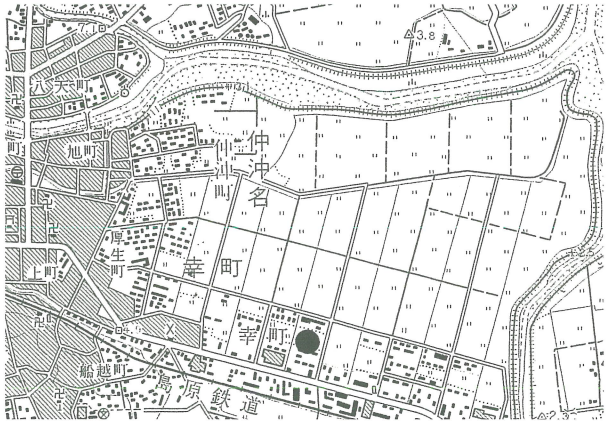
平成12年度①と同じ。今回調査地は住宅街の中にあり、現況はバラス敷きの駐車場で、標高は2.5mである。

2．調査記録

現況はすでに盛土がなされている状況であったので、重機によりこれを掘削、水が湧き出す状況で、遺構の確認はできなかった。

3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（S－1/25,000）

トレンチ配置図（S－1/5,000）

11－4．田井原条里遺跡（たいばるじょうりいせき）

平成14年度②

1．調　査　地　　諫早市仲沖町274－1ほか
2．調 査 原 因　　病院建設
3．調 査 期 間　　平成14年8月16日
4．調 査 面 積　　40㎡
5．調 査 区 分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

平成12年度①と同じ。調査地は市街地に隣接する水田地帯にある。現況は田で標高は３ｍである。

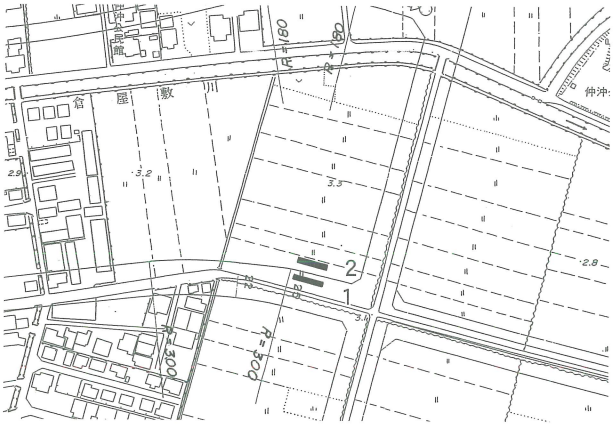
2．調査記録

20×１ｍのトレンチ２本を重機で掘削。層位は１層－耕作土、２層－床土、３層－灰白粘土層、４層－青灰色粘土層である。

3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。

調査位置図（Ｓ－1/25,000）



トレンチ配置図（Ｓ－1/5,000）

11－５．田井原条里遺跡（たいばるじょうりいせき）

平成14年度③

１．調　査　地	諫早市幸町284－１ほか
２．調査原因	宅地造成
３．調査期間	平成14年12月17日～平成15年１月17日
４．調査面積	135㎡
５．調査区分	範囲確認調査
６．調査後措置	工事実施・現状保存
７．調査担当者	川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

平成12年度①と同じ。調査地は市街地に隣接する水田地帯にある。現況は田で標高は4.4ｍである。条里の短冊状の地割が残る数少ない場所である。

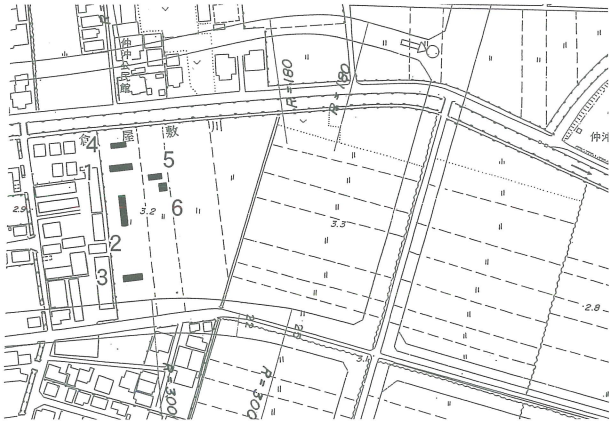
2．調査記録

６箇所のトレンチを設定、１・５・６Ｔにおいて北東方向に２列に走る杭列が確認された。杭は直径６～９㎝程度で、上面の標高はおよそ3.8ｍほどである。これらは一連のものと思われるが、時期の特定はできなかった。２・４・５Ｔの最下部では砂礫層が確認された。

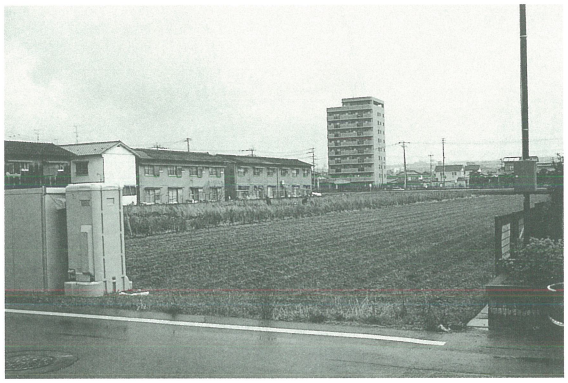
3．調査所見

遺構については現状保存が見込まれることから、調査終了後、工事に着手した。

調査位置図（S－1/25,000）



トレンチ配置図（S－1/5,000）



調査地近景

２Ｔ

１Ｔ

１Ｔ

11－６．田井原条里遺跡（たいばるじょうりいせき）

平成14年度④

1．調　査　地　　諫早市幸町311－３
2．調査原因　　店舗建設
3．調査期間　　平成15年１月15日～16日
4．調査面積　　20㎡
5．調査区分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

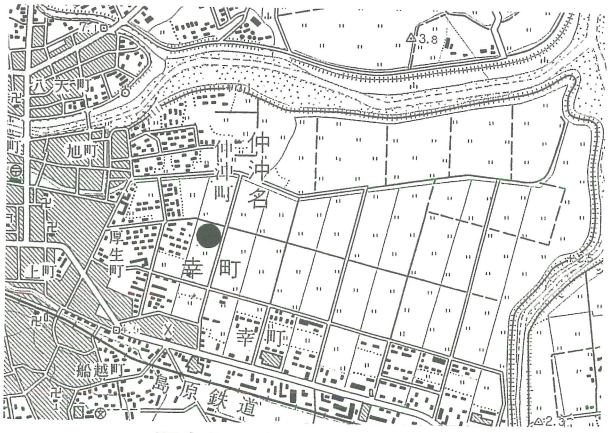
平成12年度①と同じ。調査地は市街地に隣接する水田地帯にある。現況は田で標高は3.6mである。

2．調査記録

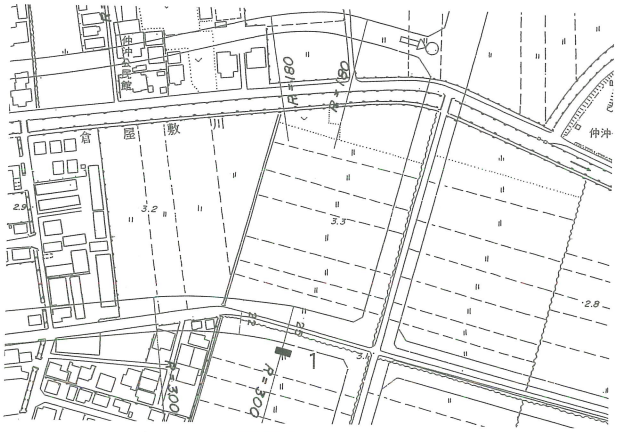
20×1mのトレンチを1箇所設定、層位は1層－耕作土、2層－床土、3層－灰白粘土層、4層－青灰色粘土層である。

3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（S－1/25,000）



トレンチ配置図（S－1/5,000）

11－7．田井原条里遺跡（たいばるじょうりいせき）

平成15年度①

1．調　査　地　　諫早市幸町306－1ほか
2．調査原因　　病院建設
3．調査期間　　平成15年11月26日
4．調査面積　　40m²
5．調査区分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

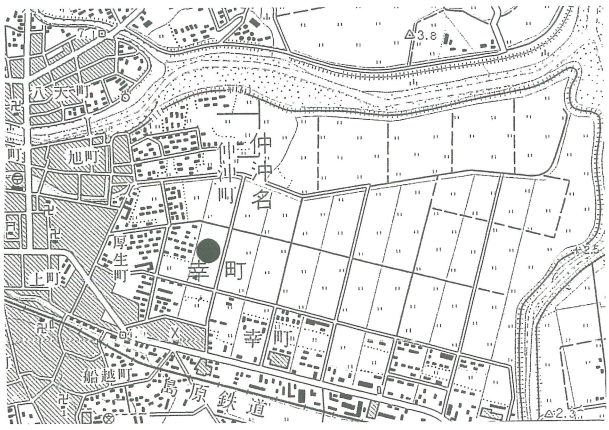
平成12年度①と同じ。調査地は市街地に隣接する水田地帯にある。現況は田で標高は3.3mである。

2．調査記録

20×1mのトレンチを2箇所設定し重機で掘削、層位は1層－耕作土、2層－床土、3層－灰白粘土層、4層－青灰色粘土層である。

3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（S－1/25,000）

トレンチ配置図（S－1/5,000）

11－8．田井原条里遺跡（たいばるじょうりいせき）

平成15年度②

1．調　査　地　　諫早市幸町301－4
2．調 査 原 因　　土地売却
3．調 査 期 間　　平成16年1月26日
4．調 査 面 積　　90㎡
5．調 査 区 分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

平成12年度①と同じ。調査地は市街地に隣接する水田地帯にある。現況は田で標高は3.6mである。

2．調査記録

30×1mのトレンチを3箇所設定し重機で掘削、層位は1層－耕作土、2層－床土、3層－灰白粘土層、4層－青灰色粘土層である。

3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。

調査位置図（S－1/25,000）

トレンチ配置図（S－1/5,000）

12．永昌遺跡（えいしょういせき）

1．調　査　地　　諫早市永昌町344－１ほか
2．調査原因　　宅地造成
3．調査期間　　平成12年11月13日～16日
4．調査面積　　24㎡
5．調査区分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

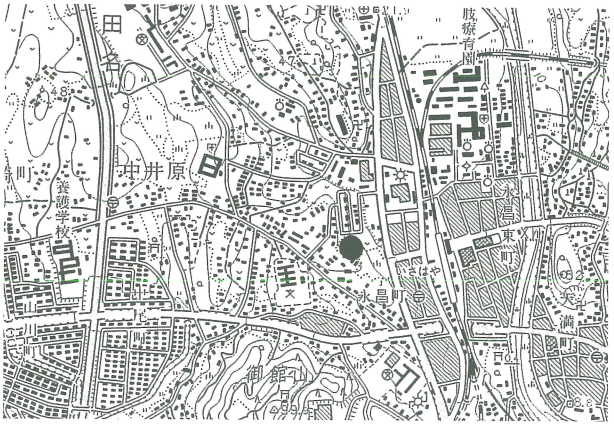
江戸時代、諫早は佐賀藩諫早領であったが、近隣には佐賀本藩が諫早領内の政治・経済を監視する目的で置いた永昌代官所や俵銭方などがあった。また、長崎街道に伴う永昌宿があり、交通の要地でもあった。今回の調査地は、旧国道34号線に隣接する標高40mほどの丘陵に位置する。現在では宅地化が進み、住宅が密集している。

2．調査の記録

調査は２×２ｍのトレンチを６箇所設定して行った。層位は、１層－表土、２層－茶褐色土、３層－地山（安山岩風化礫層）である。２・５Ｔでは地山が落ち込んだ箇所に、赤色の粘性を帯びた層があるが、これは無遺物層である。

3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（Ｓ－1/25,000）

トレンチ配置図（Ｓ－1/5,000）

13．旧長崎刑務所跡地（きゅうながさきけいむしょあとち）

1．調　査　地　　諫早市野中町508－１外５筆
2．調 査 原 因　　土地売却
3．調 査 期 間　　平成13年４月10日～４月25日
4．調 査 面 積　　140㎡
5．調 査 区 分　　試掘調査
6．調査後措置　　調査後工事
7．調査担当者　　秀島　貞康

１．遺跡の立地と環境

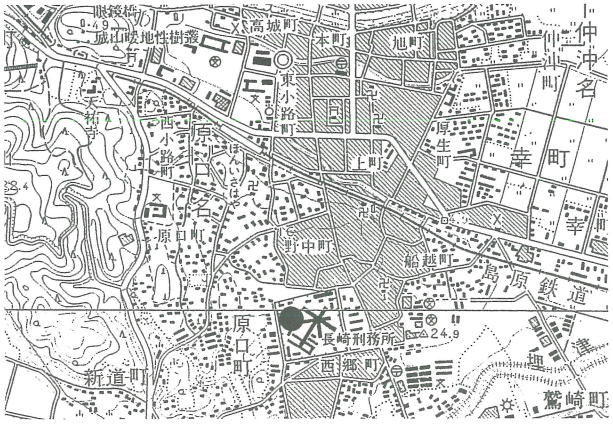
遺跡は市街地南部の低丘陵地に位置しており、標高は13m前後を測る。この丘陵は通称船越丘陵と呼び、『和名類聚抄』に載せる「新居爾比井」、『延喜式・兵部省式』の船越駅の比定地とされるものの、その確証は未だ把握されていない。調査地は明治29年に旧長崎刑務所が建設された場所で、かつ小字は「操練場」とされ、いつの時期に操練する場として利用されたのか不詳である。調査地東には細型銅剣を出土した（注１）という諫早農業高等学校遺跡が隣接する。

２．調査の記録

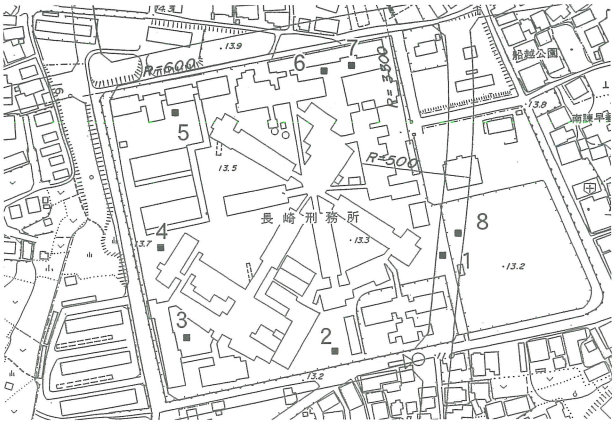
調査は敷地内８箇所にトレンチを設定して実施したが、第１裏門に設定した南トレンチからわずかに18世紀代の土壙１基を検出した以外は、包含層や遺構の検出はなされなかった。これは刑務所開所以降の工作物などの残滓埋納にかかる度重なる撹乱によるものであり、事実出土する遺物も開所以降のものであった。

３．調査所見

土壙は長軸1.1m、短軸0.8m、深さ７㎝ほどの楕円形状のもので、覆土から土師器小皿、銅緑釉碗、弥生土器を出土するものの、遺構の残りは極めて悪かった。これは前述の撹乱等によるものであり、遺跡の存在は極めて低いものと思量された。



調査位置図（Ｓ－1/25,000）



トレンチ配置図（Ｓ－1/5,000）

14－１．小野条里遺跡（おのじょうりいせき）

平成13年度

１．調　査　地　　諫早市宗方町1126

２．調 査 原 因　　店舗建設

３．調 査 期 間　　平成13年３月18日～30日

４．調 査 面 積　　40㎡

５．調 査 区 分　　範囲確認調査

６．調査後措置　　工事実施

７．調査担当者　　秀島　貞康

１．遺跡の立地と環境

調査地点は県下第一の面積を有する諫早平野の南側を走る、国道57号線に接してすぐ南にあり、長地型の畦畔が南北に走り８枚の田を区画している。南北130m、東西100mほどを測る。小字は「瀬六」で西の境が長野町との大字境である。周辺には条里の坪数詞名が残り、北方の川内町との間に36町ほどが認められる。この中に、「二ノ坪」、「三ノ坪」、「八ヶ坪」、「四ノ坪」、「大坪」などの小字が残る。

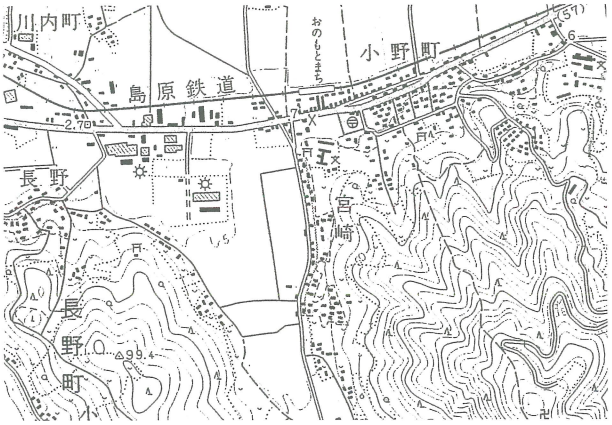
近隣での調査例は複数遺跡がある。条里制施行の有無と時期の確定などを目的とし、昭和61年度からの３か年で諫早市教育委員会が実施した範囲確認調査では、しがらみ様遺構、溝状遺構、杭列が確認されている（『宮崎館遺跡等範囲確認調査報告書』諫早市文化財調査報告書第７・９・11集　1987・1988・1989　諫早市教育委員会）。また、諫早市埋蔵文化財調査協議会が実施した平成６年度の小野曽屋遺跡、平成７年度の小野扇町遺跡の調査では、縄文時代晩期から古墳時代前期までの遺物、遺構が出土しており、条里制施行以前から周辺で活発な生産活動が行われていたことを髣髴させる（『小野曽屋遺跡』1995・『小野扇町遺跡』1996　ともに諫早市埋蔵文化財調査協議会）。

２．調査の記録

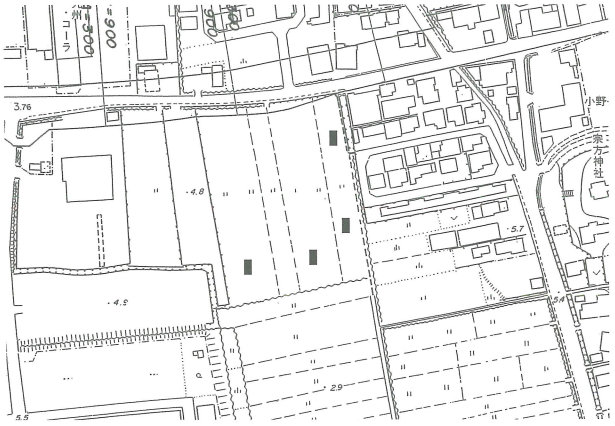
調査地点は前記のような環境下にあるため、条里遺構その他の時期の遺構の確認を企図してトレンチを４箇所設定した。しかし、各トレンチからは包含層の検出がなされず、また遺物を包含する灰茶色粘土層の検出もなされなかった。

３．調査所見

以上により、当該地は生産地としての条里遺構の範囲内にあるものの、生産活動を示す遺物等の検出はなされない地点であると想定された。



調査位置図（S－1/25,000）



トレンチ配置図（S－1/5,000）

14－2．小野条里遺跡（おのじょうりいせき）

平成14年度

1．調　査　地　　諫早市小野町2648－3
2．調 査 原 因　　土地売却
3．調 査 期 間　　平成15年1月22日
4．調 査 面 積　　9㎡
5．調 査 区 分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　本調査不要
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

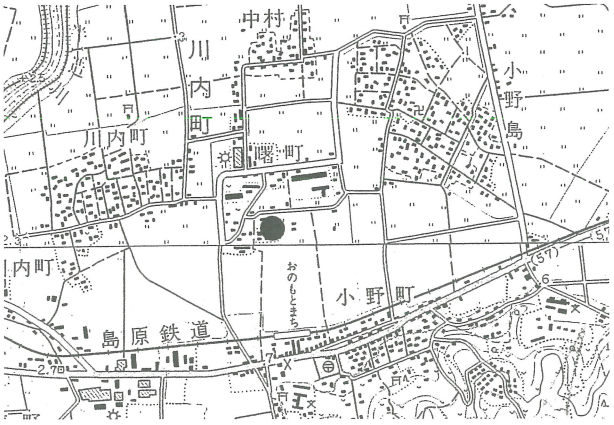
平成13年度に同じ。今回調査地点は、国道57号線の北側、諫早平野内の集落の一角にある。現況は畑で、標高は3ｍである。

2．調査の記録

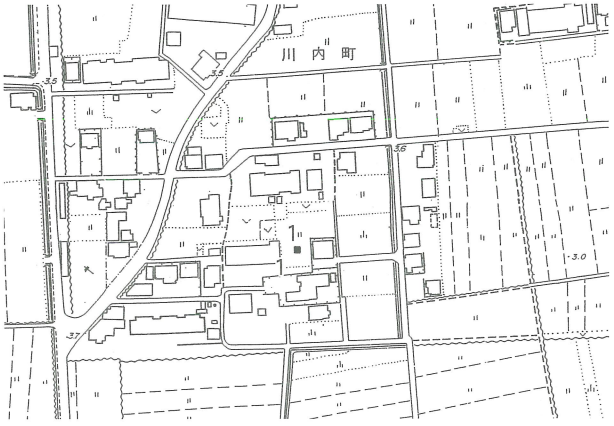
調査は3×3ｍのトレンチ1箇所を設定して行った。層位は、1・2層－瓦片などを含む埋土、3層－灰白色粘土層、4層－青灰色粘土層であり、4層は地表面から65cmほどのところで確認される。

3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（S－1/25,000）



トレンチ配置図（S－1/5,000）

15－１・２．小栗Ｃ地点遺跡（おぐりＣちてんいせき）

平成13・14年度

１．調　査　地　　諫早市小川町760－２ほか
２．調査原因　　宅地造成
３．調査期間　　平成14年３月12日～25日
　　平成14年４月22日～24日
４．調査面積　　34㎡（13年度）・14㎡（14年度）
５．調査区分　　範囲確認調査
６．調査後措置　　工事着手（Ａ地点）、本調査の必要あり（Ｂ地点）
７．調査担当者　　川瀬　雄一

１．遺跡の立地と環境

今回調査地は標高60ｍほどの丘陵に位置する。以前は耕作が行われており、これに伴う石垣が残存しているが、現在では耕作も行われず、草木が繁茂した状態となっている。

近隣での過去の調査においては、今回の調査地のやや北側で、平成８年度に弥生時代後期の丹塗りの筒形器台が出土している。北側にやや離れた丘陵では、弥生時代の甕棺墓や古墳時代の箱式石棺墓、中世の土壙墓が出土している（『小栗Ｂ遺跡』長崎県埋蔵文化財集報告Ⅷ　長崎県文化財調査報告書第75集　長崎県教育委員会　1985、『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書第４集　諫早市教育委員会　1983）。

２．調査の記録

調査は標高56ｍの丘陵頂部（Ａ地点）とやや北側に下がった標高50ｍの裾部（Ｂ地点）の２箇所において行った。

Ａ地点には１～４、６Ｔの５箇所のトレンチを設定、１層－表土、２層－茶色砂質土、３層－安山岩風化礫層、４層－地山である。２層には時期差のある遺物がわずかに含まれる。

Ｂ地点には５、７～10Ｔの５箇所のトレンチを設定、１層－表土、２層－茶色砂質土、３層－赤色粘土層、４層－地山である。２層には時期差のある遺物がわずかに含まれる。３層は、ひと抱え大～人頭大～拳大の石を含む遺物包含層である。10Ｔでは直径50㎝、深さ20㎝のピットが検出された。８Ｔの２層からは、大量の滑石を含む浅鉢形の縄文土器が出土した。遺物包含層と遺構が出土したことから平成14年度に継続調査を実施、11～14Ｔの４箇所のトレンチを設定した。11Ｔで直径30㎝、深さ16㎝・直径20㎝、深さ６㎝のピット２基が検出された。また遺物包含層の３層も各トレンチで確認された。

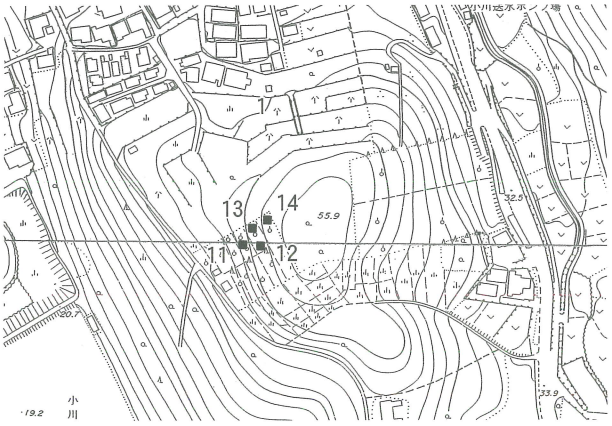
１は縄文時代前期の曽畑系かと見られる浅鉢で、口径15㎝、器高６㎝。器壁は薄く、底部内面がふくらむ。大量の滑石を含んでおり滑沢がある。

３．調査所見

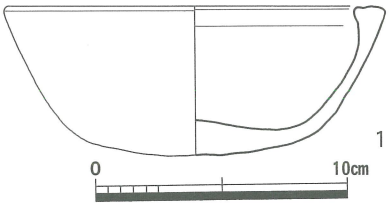
調査結果から、Ａ地点については本調査不要と判断した。Ｂ地点については、遺物包含層の３層と遺構が出土しており、本調査の必要があると判断したが、その後開発事業範囲の見直しがあり、本調査対象区域から除外され、現状保存となっている。

調査位置図（S－1/25,000）

トレンチ配置図（H13・S－1/5,000）



トレンチ配置図（H14・S－1/5,000）



出土土器（S－1/3）

16．菅牟田池遺跡（すがむたいけいせき）

1．調　査　地　　諫早市福田町964－1ほか
2．調査原因　　圃場整備
3．調査期間　　平成14年5月8日～28日
4．調査面積　　48m²
5．調査区分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施（一部設計変更）
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

調査地は菅牟田溜池の南側に位置する畑地で、南側へ向かって段々に下がっていく地形である。標高136～150mである。

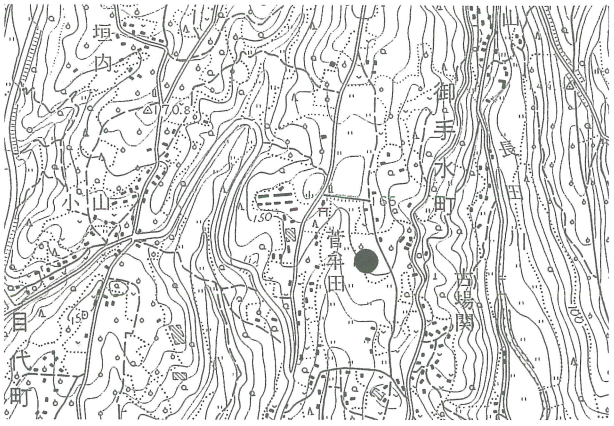
2．調査の記録

13箇所のトレンチを設定した。2T・6T以外のトレンチでは開墾時の造成の痕跡が顕著であった。2T・6Tにおいて縄文時代早期を主体とする遺物包含層が確認されたが、これらは極めて部分的に残存していたものである。

1・2は縄文土器。3・4は石鏃。3は安山岩で0.5g。4は黒曜石で0.3g。局部磨製。

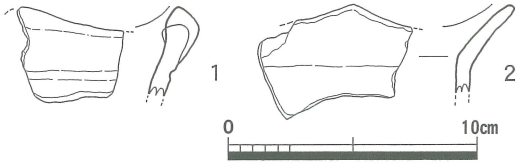
3．調査所見

工事計画では2T・6Tの箇所に水路が通る予定であったが、調査結果をもとに市農村建設課と協議を行い、設計変更により現状保存とした。

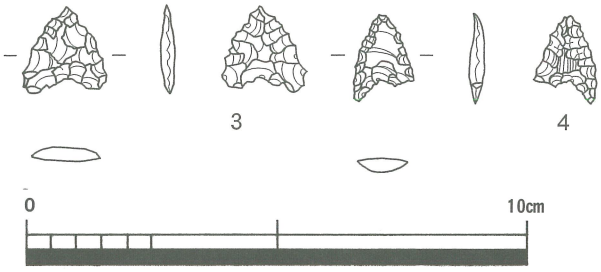


調査位置図（Ｓ－1/25,000）

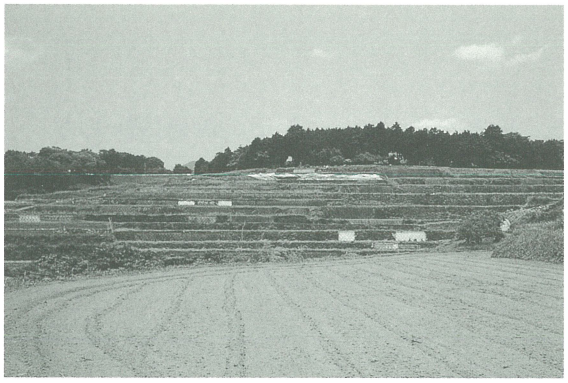
トレンチ配置図（Ｓ－1/5,000）



出土土器（Ｓ－1/3）

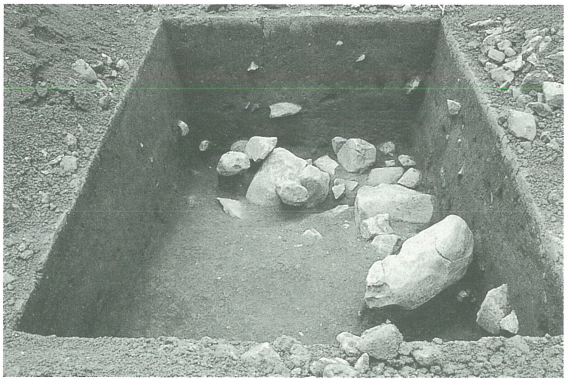


出土土器（Ｓ－2/3）



調査地近景

調査風景（左：６Ｔ、右：２Ｔ）



６Ｔ

６Ｔ　東壁

17．宮崎館遺跡（みやざきたちいせき）

1．調　査　地　　諫早市小野町494－1ほか
2．調 査 原 因　　共同住宅建設
3．調 査 期 間　　平成15年2月12日
4．調 査 面 積　　8㎡
5．調 査 区 分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

遺跡は金比羅岳（247m）から北側に伸びる丘陵の先端部、国道57号線の南側に位置する。

当地には「館（たち）」という字名が残っている。背後には小野城跡があり、周辺には天文年間の六地蔵石幢や多数の五輪塔などの残欠も見られることから、城主に係わる居館跡の存在が想定されている。また近隣には6世紀代の小野古墳も存在する。

昭和61年度からの3か年で実施した範囲確認調査では、2間×3間の掘立柱建物や溝状遺構が確認されている（『宮崎館遺跡等範囲確認調査報告書』諫早市文化財調査報告書第7・9・11集　諫早市教育委員会1987・1988・1989）。

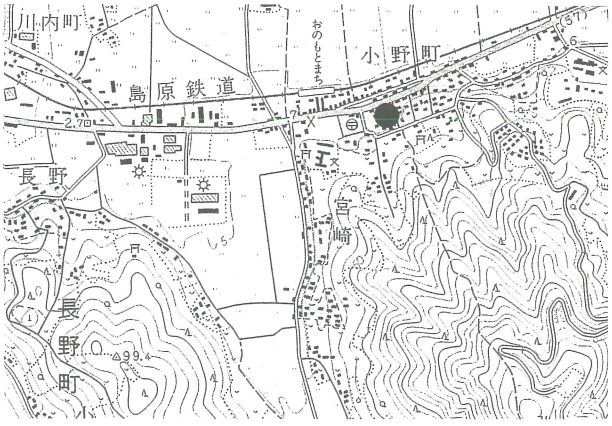
今回調査地は、国道57号線南側に隣接する住宅街の一角にある。

2．調査の記録

調査は4×2mのトレンチを1箇所設定して行った。地表面から30cmほどで、黒褐色粘土の堅緻な層があり、これは過去の調査でも確認がされている明治期の造成面と思われる。また、この層を掘り込んだ廃棄壙3基が確認された。

3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（S－1/25,000）

トレンチ配置図（S－1/5,000）

18．上横址遺跡（かみよこしいせき）

1．調　査　地　　諫早市目代町190－３ほか
2．調 査 原 因　　土地売却
3．調 査 期 間　　平成15年５月１日～12日
4．調 査 面 積　　28㎡
5．調 査 区 分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

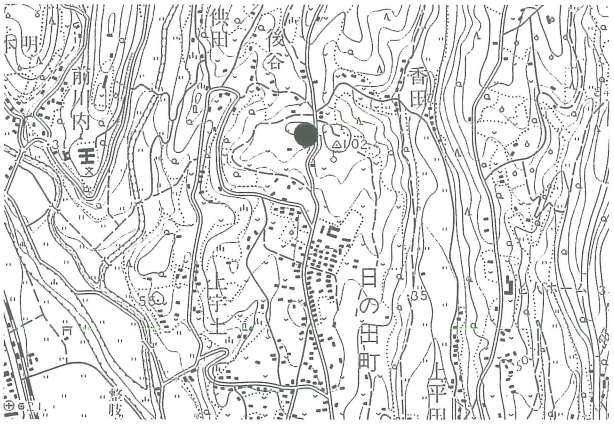
調査地は、市街地の郊外にあり、近年大規模な宅地分譲がなされた住宅地の、やや北側に位置する。標高は100ｍで、現況は畑である。

2．調査の記録

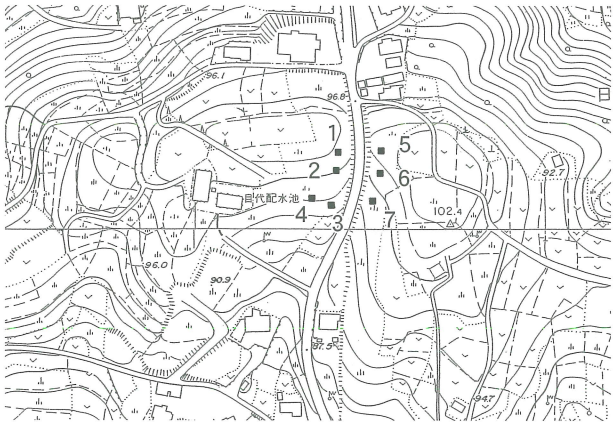
調査地は、市道金谷久保片木線により東西に分断されている。市道の東側に１～４Ｔ、西側に５～７Ｔの合計７箇所のトレンチを設定した。層位は１層－耕作土、２層－赤褐色粘質土、３層－安山岩風化礫層（地山）である。いずれのトレンチにおいても、現地表面から40～60cmで地山に到達する。

3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（Ｓ－1/25,000）



トレンチ配置図（Ｓ－1/5,000）

19．大野台遺跡（おおのだいいせき）

1．調　査　地　　諫早市本野町937－2
2．調査原因　　圃場整備に伴う土砂採取
3．調査期間　　平成16年8月6日～11日
4．調査面積　　32㎡
5．調査区分　　範囲確認調査
6．調査後措置　　工事実施
7．調査担当者　　川瀬　雄一

1．遺跡の立地と環境

標高200mにある。現況は畑である。

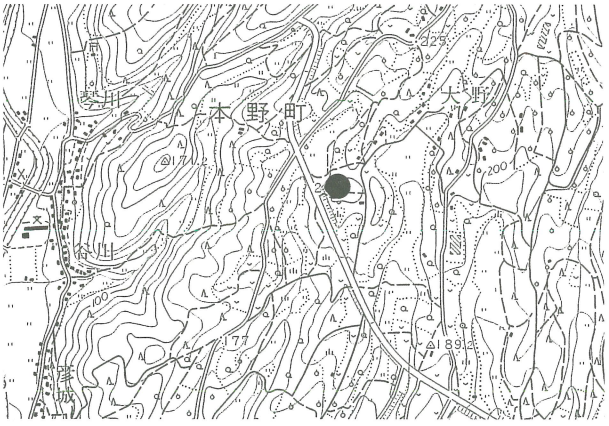
2．調査の記録

調査は4×4mのトレンチ2箇所を設定して行った。いずれにおいても耕作土直下で、地山である安山岩風化礫や埋土が確認された。

1はナイフ形石器。石材は黒曜石で重量3.8g。

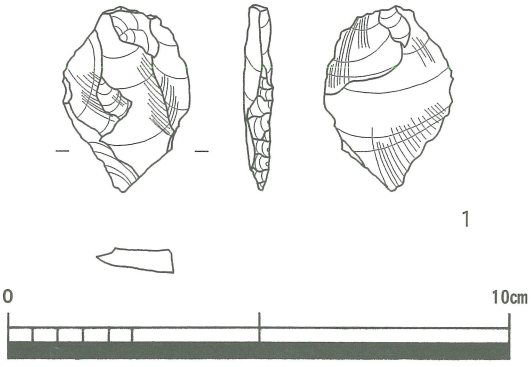
3．調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったので、本調査は不要と判断した。



調査位置図（S－1/25,000）

トレンチ配置図（S－1/5,000）



出土石器（S－2/3）

20．貝津横島Ｂ遺跡（かいづよこしまＢいせき）

１．調　査　地　　諫早市貝津町1288－３ほか
２．調査原因　　工業団地造成工事
３．調査期間　　平成16年９月16日～10月18日
４．調査面積　　56㎡
５．調査区分　　範囲確認調査
６．調査後措置　　本調査（平成18年度）
７．調査担当者　　川瀬　雄一

１．遺跡の立地と環境

標高１ｍ未満の低地にある遺跡である。以前は水田耕作がされていたとのことであるが、現在ではヨシなどが繁茂している。

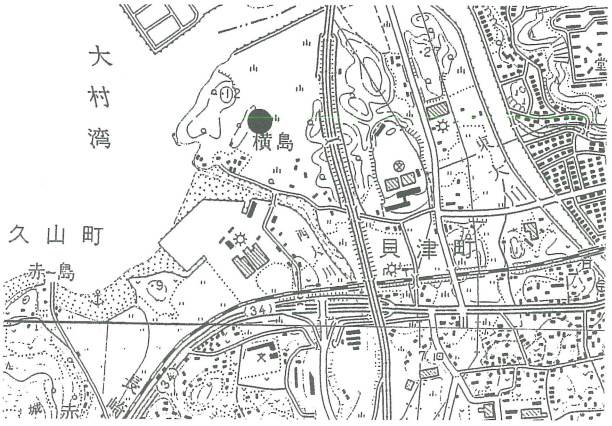
２．調査の記録

計５箇所のトレンチを設定した。層位は、１層－表土、２層－礫層、３層－砂質土、４層－地山である。２層は水平堆積で、１・２・５Ｔの範囲に分布している。この層は耕作を可能にするために埋め立てられた整地層と思われる。

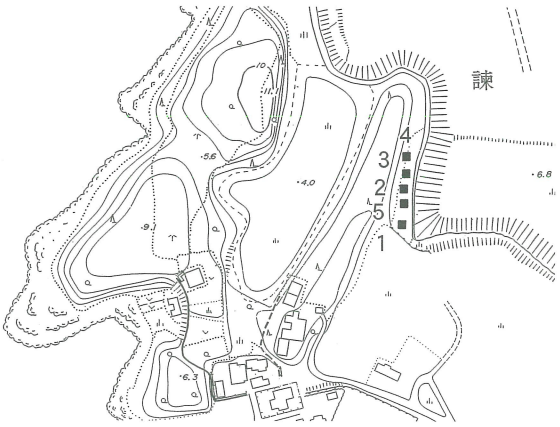
遺物は２、３層から出土、内容は縄文時代前期の曽畑式土器・弥生時代中期の土器・石鏃・スクレーパーなどで、近世の陶磁器も出土した。石列は２層の上部に構築されている。当地は、東側に向かって傾斜する砂岩の岩盤を基盤とし、この上に砂質土や木質遺物が堆積していることから、水の流入する環境であったと思われる。１は深鉢で、縄文時代前期の曽畑式土器。口径22㎝。外面にはタテ方向にハケ状の沈線→口縁最上部に11～12本１単位の横位の短沈線文を、内面には横位の沈線をランダムに施す。口唇部には刺突文を施す。２～６は甕形土器の口縁部。弥生時代中期中頃～後半。７は甕形土器の底部。８は壺形土器の口縁部。９は玄武岩製の石斧。101.3ｇ。10は安山岩製のスクレーパー。71.7ｇ。

３．調査所見

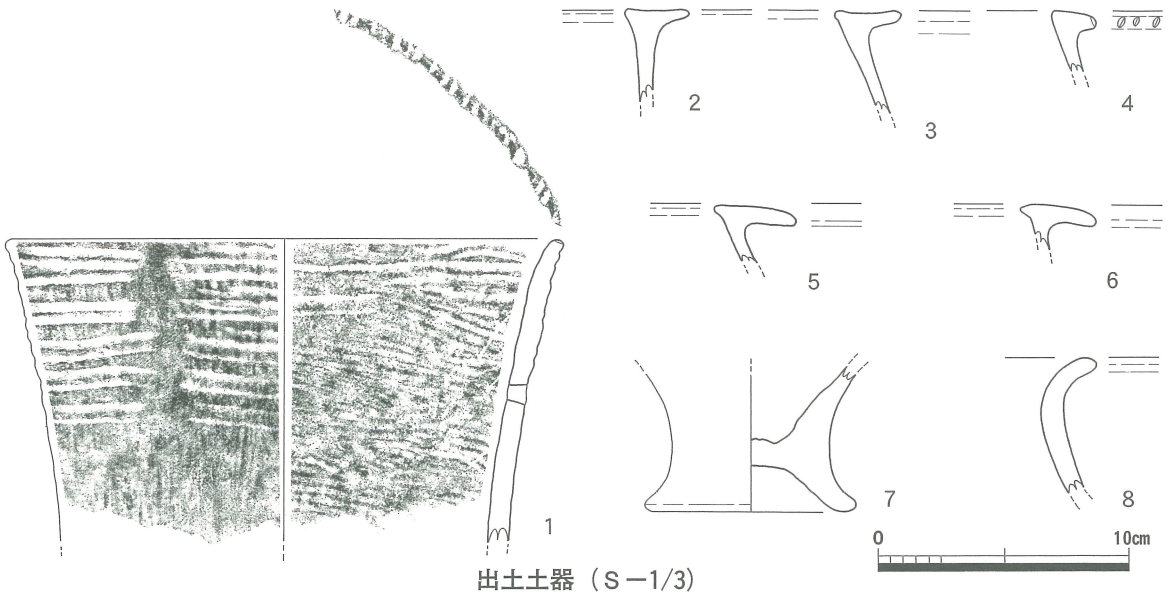
調査を行ったトレンチのうち、１・２・５Ｔは遺物が密に出土する状況であり、工事前の本調査が必要と判断した。本調査については平成18年度に実施の予定である。



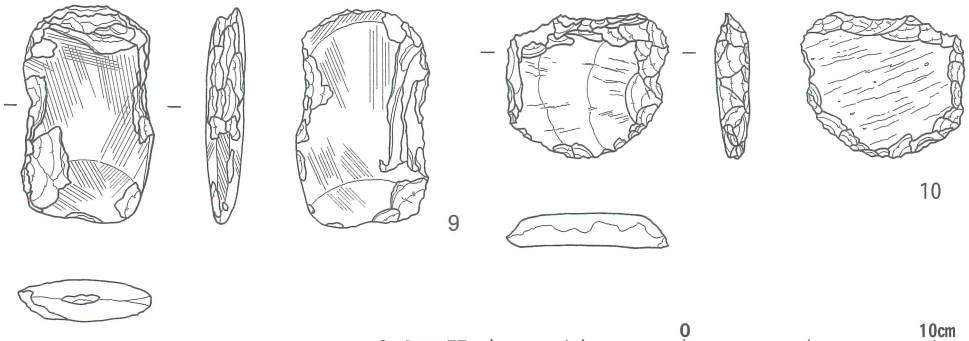
調査位置図（Ｓ－1/25,000）



トレンチ配置図（Ｓ－1/5,000）



出土土器（S－1/3）



出土石器（S－1/3）

調査地近景

1 T

2 T

4 T

21．有喜・上原遺跡（うき・うえはらいせき）

1．調　査　地	諫早市松里町114－2	
2．調査原因	個人住宅建設	
3．調査期間	①範囲確認調査	平成16年10月27日～11月2日
	②本調査	平成17年3月2日～30日
		平成17年4月11日～6月10日
4．調査面積	①範囲確認調査	40㎡
	②本調査	250㎡
5．調査区分	①範囲確認調査	
	②本調査	
6．調査後措置	調査後工事	
7．調査担当者	秀島　貞康	

本報告書第Ⅱ章に掲載している。

22－１．諫早南部第１地区土地区画整理事業地内遺跡確認調査（第１次）

１．調　査　地　　諫早市上野町1126番地ほか
２．調 査 原 因　　土地区画整理事業
３．調 査 期 間　　平成17年３月18日～３月30日
４．調 査 面 積　　143㎡
５．調 査 区 分　　試掘調査
６．調査後措置　　工事実施
７．調査担当者　　秀島　貞康

１．遺跡の立地と環境

調査地は市街地南部の低丘陵地にあり、標高で15m前後を測る。

船越町や上野町などを含む一帯は、古代、中世を通じて現代まで船越と呼称され「船越駅」、「船越城」などが立地した場所である。これらの地名や関連する記事は平安時代に成立した『延喜式』、『和名類聚抄』、『宇佐大鏡』、鎌倉～南北朝期の『高城寺文書』、『宗像神社文書』、『深江文書』、『深堀文書』や、戦国時代の『宮後三頭大夫文書』、『(各種) 軍忠状』などから窺い知ることができる。しかし周辺一帯は古くから市井の中心であったため人家が集合して近世・現代に至っている。このため前述の遺構の所在さえ把握不可能な状態となってしまい、遺跡を周知化するに到っていないのが実情である。

２．調査の記録

①調査は道路部分及び事業予定地を対象に実施した。道路部分では旧宅の基礎、及び土壙配列を基にグッリドを設定し調査を実施した。調査地は度重なる造成によりかなりの程度荒れており、遺構面まで達する撹乱が多かった。検出した遺構は土壙10基、柱穴様ピット13本、川原石胴突き基礎10本である。

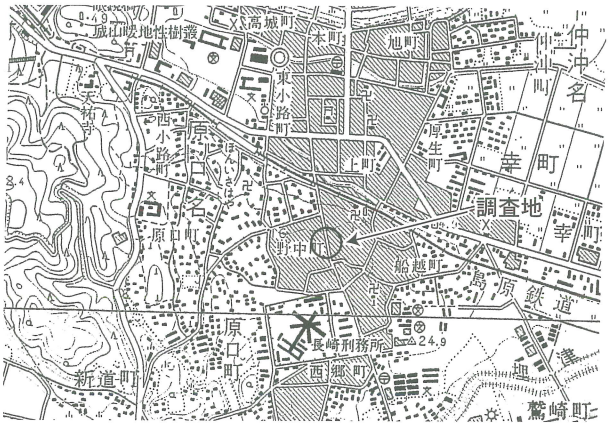
３．調査所見

今次調査により検出した遺構は次のとおりであるが、相互に関連する遺構が少なく、個々の機能の推定まではいたらなかった。

１）土壙　10基を確認した。１～1.2mの隅丸方形の形状を呈し、深さは30～90cmとまちまちで、また壁の立ち上りも垂直のものから擂鉢状のものと一定していない。５号土壙では紅皿や染付磁器などが出土し、近代以降の所産と見られ、また７号土壙からは瓦片や銅緑釉碗の内野山系陶器などが出土し、近世元禄期以降の所産であることが知れた。当初は相互に関連する遺構群かとも思われたが、機能不明の土壙群である。

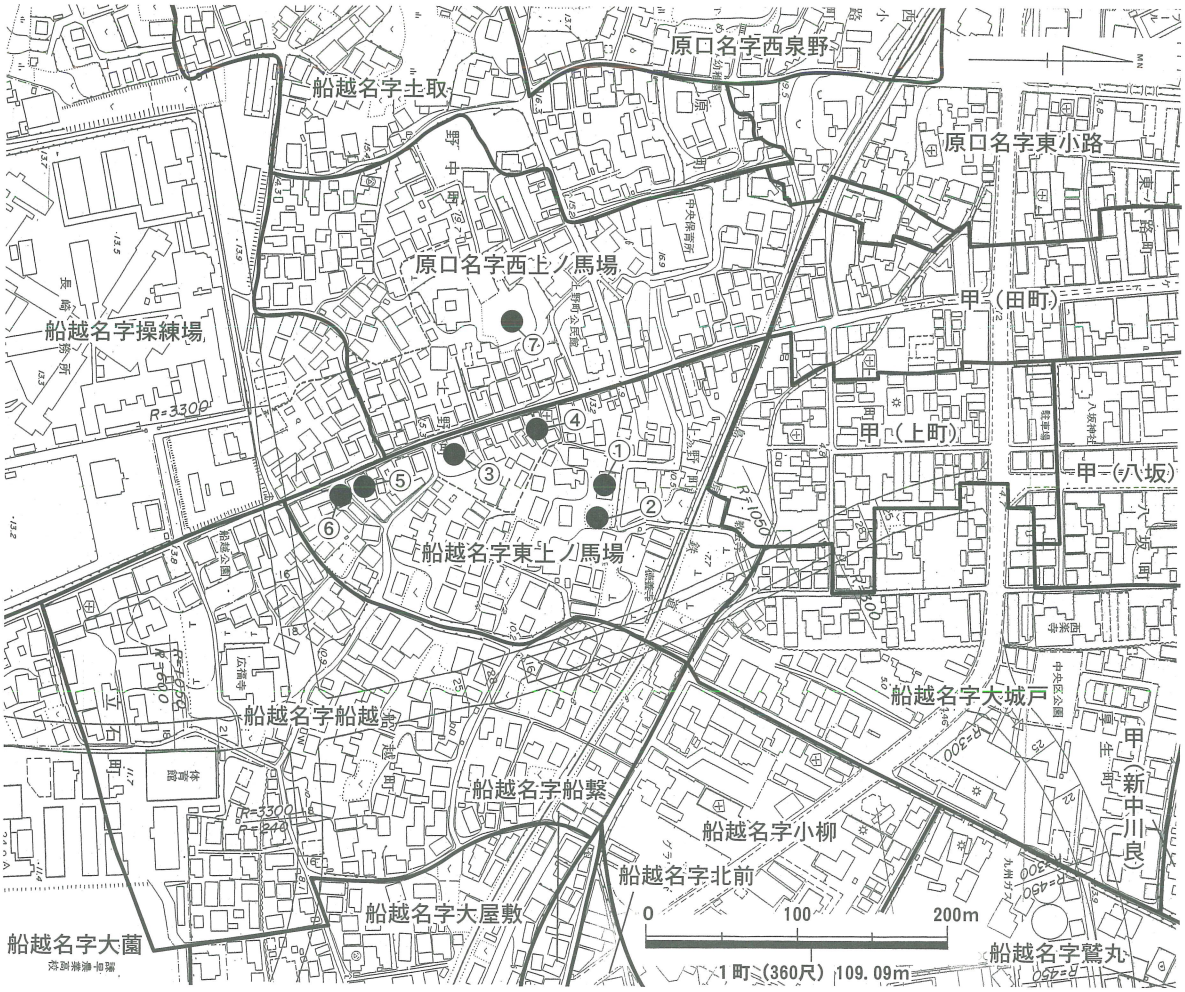
２）柱穴様ピット群　直径30cm程の掘り方を持ち、中には柱痕を残すものも散見される。しかし相互に纏まりが認められず、構造物を復元するのに有用なピットが僅少であった。これらに接続するものは、今次の調査区外に展開するものと思われる。

３）川原石胴突き基礎　10cm大の川原石を径60cm程に50個前後の石を使って突き固め、深さ50cmほどに基礎を入れている。



第１図　調査位置図（Ｓ－1/25,000）

①諫早市上野町1126番地	平成16年・17年調査
②諫早市上野町1127番地	平成17年・18年調査
③諫早市上野町1159番地	平成17年・18年調査
④諫早市上野町1164番地	平成18年調査
⑤諫早市上野町1150番地	平成18年調査
⑥諫早市上野町1149番地	平成18年調査
⑦諫早市上野町 524番地	平成18年調査



第２図　調査位置図と小字一覧図（Ｓ－1/5,000）